

第 59 号

2025 年 3 月 15 日

会 報

青山学院大学
日本文学会

(題字) 湯地 孝先生



巻頭随筆

青山学院創立一五〇周年と

日本文学科・日本文学会

日本文学会会長 小松 靖彦



青山学院は二〇二四年に創立一五〇年を迎えました。日本文学科と、同学科専任教員・在籍生（学部生と大学院生）・卒業生からなる日本文学会は一九六六年に発足し、一五〇年の約五分の三の歴史を刻んできています。

戦前の青山学院は、当時日本の植民地となっていた朝鮮・台湾から留学生を多数受け入れました。青山学院で自由・平等・博愛の精神を体得した留学生たちは、在学中や帰郷後に独立運動に身を投じ、また、独立への思いを胸に新たな文学を創造

しました（朝鮮からの留学生については、創立一五〇周年記念事業として『青山学院で学んだ韓国朝鮮の文学者たち』という本にまとめました）。

このように、海外の若い人々に開かれた「青山スピリット」を最も強く受け継いでいる、また受け継ぐことができるのが日本文学科です。二〇二四年五月時点で、日本文学科の正規の留学生数は三二名、学内では総合文化政策学科の三五名に次ぐ二位です。学科の在籍者に占める割合では、国際コミュニケーション学科の六・九％に次ぐ、六・五％。また、大学院博士後期課程に国費留学生が在籍しているのは、全研究科の中で日本文学・日本語専攻のみです（二二名在籍）。さらに近年では、日本文学・日本語専攻は、アメリカ合衆国、インド、中国などの大学院生を客員研究員として受け入れ、博士論文の制作を支援しています。日本文学科は

現在、青山学院の中でも留学生や海外の若手研究者に対して広く門戸の開かれた学科となっています。

ところで、私は二〇二二・二〇二三年度に本学国際センター所長を務めました。日本文学科出身の所長は初めてです。日本文学科出身であったことは、青山学院大学と、ベオグラード大学（セルビア）、オスロ大学（ノルウェー）、ワルシャワ大学（ポーランド）などの大学と協定を結ぶ原動力となりました。

私はそれぞれの大学の日本研究者と信頼関係を築きながら、青山学院大学日本文学科には優れた日本語・日本文学・中国文学・日本語教育研究者が集まっていることを紹介し、将来の豊かな学術交流の可能性を示しました。交流の意義を深く理解した各大学の日本研究者たちが、協定を大学間にも推し進めてくれました。実際に二〇二四年七月には、日本文学科主催で、ワルシャワ大学東洋学部のイヴォナ・コルディンスカ・ナヴォロツカ教授を招き、講演会「ポーランド語による初の『源氏物語』訳について」を開催しました（二〇二五年三月に講演録を刊行）。

一九六六年当時、「国文学科」が一般的名称であった中、青山学院大学

はいち早く「日本文学科」を名乗り、「世界的視野に立つ新しい日本文学（日本文化）研究」によって、「日本文学（日本文化）」の海外への紹介および相互の文化交流の面において役割を果たすという目標を掲げました（「文学部日本文学科増設届出書」）。多数の留学生を受け入れ、海外の研究者との交流も緒に就いた今、目標達成の条件は整ったと言えます。

日本文学科と日本文学会には、目標に向けて大きく踏み出す時が来ています。具体的には、留学生と日本人学生の交流の活発化、日本文学科生と協定校の日本学科生との継続的交流の実現、海外の日本研究・教育機関——特に戦禍を受けているウクライナの協定校キウ国立大学日本語専攻学生への支援などが取り組むべきこととして考えられます。

私は、日本語・日本文学を熱心に学ぶ、さまざまな国の若い人たちに会ってききました。日本学科生の方々がそうした人々との交流によって、日本語・日本文学を学ぶ意義を見つめ直し、さらに国や地域を超えて、日本語・日本文学研究を通じて、困難な世界に向き合う道を見出してゆくことを、日本文学会として後押ししたいと思っています。

研究余滴

資料の海の中で――『君慎』と『君戒』――

滝澤 みか

有難いことに演習を担当する機会に恵まれるようになって、前任教含め五年が経とうとしている。自分が学生のときもそうであったように、演習で作品を輪読していると、すぐにその場では答えが出せない問いが生じていく。演習だけではなく、自分の研究でも同じことはよくある。しかしすぐに答えが出なくとも、頭の片隅にいつも課題を置いて資料の海を泳いでいくことで、ひょっこりと資料の方から声を掛けてくれる。自分の研究は、そうした出会いに救われることが多々ある。

字ほどの短文ながら教訓的な内容を有している。その教えの一つに「軍ノ物語」を聞くときの心構えが書かれていたことが、資料に興味を持ったきっかけであった。

しかし、この資料の素性がよく分からない。『群書解題』や『日本教育文庫』に解説はあるものの、確たる情報が得られない。その理由の一つに、『統群書類従』以外に写本が見当たらないという状況があった。資料の末尾には「享徳二年二月五日細川右京大夫勝元上」と書かれている(図版参照)が、当然、信用して良いものか不明である。唯一の正確な情報は、「右一帖於杏花園遂一校畢」とある識語で、「杏花園」(大田南畝(一七四九)一八二三の号・蔵書)において「一校」をしたという。確かに南畝は多くの蔵書を有しているから、それだけが信頼性のある情報と言えそうだが、南畝の蔵

書目録の中には『君慎』の名は見られない。最も詳しい『群書解題』は内容的にも室町末期の成立でもおかしくないとされており、ひとまずそうした情報に拠るしかない状況であった。

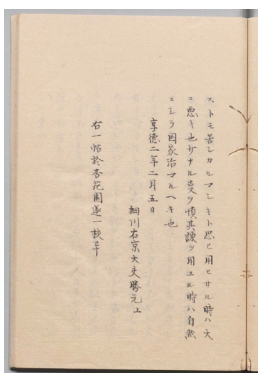
享徳二年(一四五三)の成立が事実であれば中世の教訓が窺える資料であり、また偽りであれば、いくさに関わる話が教訓的にも利用されていることは中世の作品・資料に見られるため、そうした時代のイメージもあって享徳に年代が設定されたのかもしれない。いづれにしても面白い資料であるが、関係しそうな資料を当たっても成立を繙くには至らないまま、月日は流れた。

ようやく有力な情報を得ることが出来たのは、何年も経過した、つい最近である。名古屋にある蓬左文庫に『君戒』という資料が所蔵されていることに気が付いた。

名前が似ている。まさか。すぐに閲覧申請をし、資料との対面を待った。資料を見ては違うという経験は既に何度も繰り返してきたので、気持ちを抑えつつ確認したところ、そこには間違いない。

『君慎』と『君戒』は異なる、徳川義直が作ったとされている『君戒』には先行研究や解説が存在する。その一つに、田辺裕氏「『君戒』尾張義直撰述考」(『藝林』2012)一九六九・四」という論文があり、『君慎』との関係も言及がされていた。『君慎』を調べても得られなかった情報が、『君戒』に辿り着いたことでようやく出てきたのである。しかし、『君慎』と『君戒』の関係は組上に載せた論文はこの一本のみで、先行研究の妥当性の検証が必要であり、享徳二年成立なのか、はたまた江戸成立ならば勝元へのイメージが影響して作者とされたのか、課題はまだ多く残されている。それゆえ、またここからは、別の資料の海を泳いでいくとしたい。

「図版」内閣文庫蔵『統群書類従』所収「君慎」



随想

近松との出合いを振り返り

韓 京子



「随想」を担当することになり、直近の『会報』をめくってみた。土方先生や佐伯先生、山下先生が定年をお迎えになる直前に、学科に着任してからを振り返るという内容をお書きになっていた。私の定年はもう少し先のことなので、研究対象となった近松門左衛門の人形浄瑠璃との出合いを振り返ってみようと思う。

日本文学と真剣につきあうことになったのは韓国で大学院に進学してからであった。なんとなく「死」や「死後の世界」というものへの関心があつた頃、ある記事

を目にした。一九九五年三月十七日付『週刊朝日』の「写楽をさがせばにつぼんが見える」と題した映画監督篠田正浩と文教大学理事長小尾圭之介の対談記事である。そこに登場する「歌舞伎で扱われる登場人物のすべてが死者」

「累々たる屍が芸能化されている」、「日本の芸能というのは、お葬式じゃないか」、「滅びの美学」などという言葉に吸い込まれるように惹かれてしまった。それがこの道に進んだ決定的なきっかけである。心中物という、ひたすら男女の自殺を描いていくジャンルがあることに驚きながら、修士論文のテーマとした。

韓国の大学から本学に移ってきたのは二〇一九年で、その年の日本文学講読の授業で近松の心中物を扱った。日本留学後は時代物の研究をしていたので、心中物に向き合うのは二十年ぶりであった。

そして、今年も心中物を扱っているが、『曾根崎心中』については高校で習ったものの、具体的には知らないという学生がほとんどであった。学生からは「心中物は人の死を物語にするととても失礼な作品」、「心中物の醍醐味は日常のがんだがらめの生活と非日常の華やかではかない夢の世界との闘い」または「太宰治が『道化の華』という作品を綴っていたな」と思い、自死の虚しささえ感じてしまう」などの感想があつた。

久しぶりに心中物を扱いながら、改めて気付いたことがある。ひとつは、心中の手段になぜ服毒や入水が選ばれなかったのかという点。これは、学生から質問を受けたもので、目から鱗が落ちる思いだった。芥川や太宰など近代の作家の死になじみがある学生にとっては、脇差しや剃刀を用いた心中は理解しがたいというか、意外だったようである。確かに最期の場を求めて二人が歩む道行の場面では、大坂という土地柄から数多くの橋を渡る。川に飛び込もうと思えばいつでも飛び込めるはずである。だが、「死に姿を見苦しく」ないよう「潔ぎよく」死に、「世

に類なき死に様の手本」となろうと心がけ死んでいく二人からすると、水死は選択肢にはなかったように思われる。私自身は死に方について何の疑問も持たなかったが、当然のことではなかったということに気付かされた。

もうひとつは、「死神」という語彙についてである。「死神の誘ふ命のはかなさよ」（『心中刃は水の朝日』）、「死ね」と来る死神の」（『生玉心中』）、「死神ついた耳へは意見も道理も入るまじ」（『心中天の網島』）などと、主人公の二人の死は避けられないものだという雰囲気漂わせる。この「死神」は、文学作品の中でも特に近松の心中物に頻出することを知り、近松の詞章、言葉ひとつひとつの意味を考えさせられた。

修士論文を書いていた二十代の私は、心中物を理解したつもりでいた。太夫の世界では「四十、五十ははなたれ小僧」と言われるそう。住大夫も「五十五はこれからや。太夫は六十の声聞かな」と言う。五十代になった私はまだまだはなたれ小僧である。これからという思いで、改めて作品に向き合っていたい。

春季大会講演印象記

ご講演…近藤泰弘先生

「AIを用いた古典語・古典文学研究の方法について」

博士前期課程二年 中村 智貴

二〇二四年六月二二日（土）、青山学院大学日本文学会春季大会が開催された。今大会では、本学名誉教授である近藤泰弘先生に「AIを用いた古典語・古典文学研究の方法について」と題してご講演いただいた。ここでは、その講演の一部を紹介したい。

講演は生成AIとは何かという話からはじまった。生成AIは学習するうちに当初の構想から外れ、入力したテキストに対して後続する文章を出力するのではなく、知識を組み合わせて新たな文を生成するようになったとされる。しかし、生成AIは登場人物の相関図などは作成できる一方、「大島本と青表紙本の違い」に対しては誤情報を生成したという。日本文学の領域において、生成AI

Iは基礎的な問いに対してさえ適切に回答できないという現状に強い衝撃を受けた。

生成AIを文学研究に利用するには工夫が必要だとわかるが、講演では埋め込みベクトルが紹介されていた。埋め込みベクトルとは、生成AIの中にある「単語の意味を数値化したもの」のことであり、例えば「山：101010」や「川：010101」と数値化されている状態で「丘：101000」という数値が出てきたときに、数字の配列だけで「丘」は「川」よりも「山」に似ていると判断するイメージである。さらに、これらに語彙的、統語的、語用論的意味が一五〇〇次元のベクトルとして埋め込まれているものがChatGPTである。

歌集が研究対象であれば、歌をそれぞれ一五〇〇次元のベクトルに変換し、主成分分析によって二次元に圧縮し、X軸とY軸の最大・

最小を約五つ集めればよい。この手法によって、『古今集』においては「人事か景物か」が最も重要であり、次いで「花か鳥か（視覚か聴覚か）」が重要であるとわかるが、これは「仮名序」とも合致する。

同様に『百人秀歌』を分析すると、「人事か景物か」に次いで「夜か水か」が重要視されていたことが判明した。『百人秀歌』の選者である藤原定家の歌には「夜」と「水」が入っていることから、定家自身の美意識が多分に影響しているという。この発見は『古今集』的な美意識への先入観がないAIによるところが大きく、AIとの共同研究について考える契機になるのだと感じられた。

続いて、引き歌をAIによって分析する試みが紹介された。引き歌とは『古今集』などの歌集から暗に歌を引いて『源氏物語』などに用いる技法である。引き歌研究が進んでいる一方、「形としては似ていないが意味的に引き歌」の用法を見落としている可能性があるとされ、その性質上、文の形式ではなく数値をもとに比較できるベクトル検索が活躍するという。

この引き歌に関しては、ミームとの類似が指摘されていたことが印象的だった。読者が『源氏物語』の特定の歌に触れた際に「これは『古今集』のあの歌だ」といった具合に文脈が伝わるかどうか、という構造は確かにミームと類似しているように思われる。

また、ベクトル検索は比較対象が他言語でもよく、『古今集』と『白氏文集』の比較なども可能である

第五十九号 目次

巻頭随筆
研究余滴

随想
春季大会講演印象記

春季大会研究発表①

春季大会研究発表②

春季大会研究発表③

シンポジウム報告①

シンポジウム報告②

研究レポート
交換留学生レポート

キウ国立大学・リュブリャーナ
大学との学生交流

就職活動
みなさんへのメッセージ

大学院に進学して
夏期集中講義報告

留学生の動向
今年度の学生の活躍

日本文学科関係書籍
院生部会報告

新取貴重書紹介
研究室探訪①武内先生編

研究室探訪②井上先生編

日本文学科同窓会から

二〇二四年度講義題目

研究室だより・編集後記

28 25 24 22 20 18 17 16 15 14 12 11 10 9 8 7 7 6 6 5 4 3 2

という。小説や漫画などを横断した分析も期待されることから、今後の文体研究に大きく影響するよう感じられた。

講演終盤には質疑応答が活発に交わされ、講演終了後にも近藤先生の周りには在校生をはじめ、質問等で集まる多くの方々の姿があった。近藤先生のご講演を聴き、多くの方々が日本文学と生成AIの可能性を感じていたことを記しておきたい。



春季大会研究発表

『枕草子』の漢籍に関わる表現と
前期・後期章段の関係について

博士後期課程一年 内野 晴菜

平安期に成立した『枕草子』の、特に「日記的章段」と呼ばれる章

段群には、藤原定子を女主人とする女房集団の宮廷生活が記録されており、清少納言を中心とする平安貴族達の機知の会話が作品の特色として注目されてきた。本研究では、その機知の会話のうち、『白氏文集』や『史記』などの漢籍を用いていることが認められる表現を、便宜的に「漢籍表現」と呼称し、主な研究対象とする。漢籍表現は、清少納言が漢籍に通ずることを主張するための「自讃」行為と見なされがちである。しかし、文化的な主家の姿を知らしめるため、また男性貴族からいかに定子サロンが評価されていたかを示すための行為であると思われる、中関白家の盛衰に関連付けて捉える必要がある。よって本研究では、『枕草子』諸章段に散見される漢籍表現を体系的に分析し、『枕草子』という作品における漢籍表現の意義を、主家の政治的立場と結びつけて読解することを目的とした。その分析結果において、『枕草子』中の漢籍表現が、主家の盛衰（前期・後期章段の差異）に連動して、質的な変化を見せていることが指摘できる。そしてその変化は、女房の職能の一つといえる（いらいへ）

——客人応対時に発生する風流な返答——の概念を鍵とすることで、一層明瞭に把握することができるのである。前期では漢籍を用いる動機が受動的な（いらいへ）にとどまる一方で、後期では、女房自ら意志を持って漢籍を用いた対話を展開させ、不遇の定子を支える役割を果たすように変化していると考えられる。以上のように、これまで前期・後期間の差異は論じられてこなかった漢籍表現について、新たな読解の余地のあることを論ずるのが本発表である。

.....

新川和江の植物表現——比喩的意味と戦争詩における役割——

博士前期課程一年 藤本まどか

二〇二四年六月二十二日、青山学院大学日本文学会春季大会で「新川和江の植物表現——比喩的意味と戦争詩における役割——」と題して研究発表を行った。新川和江は一九二九年に茨城県結城に生まれた現代詩人であり、「日常」の中で誰しもが無意識裡に感じている「死」、「生」、「愛」など人間にとって普遍的なものの本質を言語

化することが巧みである。本発表では、新川の詩の植物表現に着目して身近に存在する言語化の媒体として最も有力なものが植物であり、またそこに新川独自の植物観があることを明らかにした。

ただし、「媒体」と言っても、新川にとって植物は「擬人的」に人間を表現するための道具ではなく、自分と同じく生命あるものであり、同列な存在である。その意識のもと、「前擬人法」的な植物表現によって、植物はそれぞれの生命を持ち、さらにその一つ一つが集まり、交わるることによって広い《世界》が繋がりを表現するものとなっている。それは、「境界無き世界観」とも言い換えられ、新川の詩の大きな特色であると言える。

また、戦争に対して寡黙であった新川の六編の戦争詩を検討し、その独自性を明らかにした。穏やかな口調でありながら、敗戦後もない時期には、「日常」を壊す戦争を凝視し、また、戦後時間が経ってからの時期には戦争を知らない世代に「戦争をしてはならない」ことを伝えようとする。その中でも特に独自の意義を持つのが

「春」である。新川は、「春」において、「日常を奪われた者」として、俯瞰的視点から戦争を見つめている。その俯瞰的視点は、新川独自の植物観を基礎に、個々の植物に〈社会的象徴性〉を託すことによってもたらされている。それは、「戦争」と「植物」を結び付ける稀有の試みであったと結論づけた。

.....

日本文学・Japanese Literature
をめぐって

博士後期課程二年 西澤 駿介

二〇二四年六月二二日、青山学院大学日本文学会春季大会にて「日本文学・Japanese Literatureをめぐって」と題して発表を行った。

近時、柳井イニシアチブという制度を利用して、カルフォルニア大学ロサンゼルス校に招聘研究員として、二〇二四年一月三日から三月二二日までアメリカに滞在した。これまでも国際学会での発表やワークショップに参加したわずかな経験に加えて、今回の滞在を通じて痛感したのは、その研究方法の違いである。

特に日本文学研究の場合、用例や注釈書を踏まえた「精読」(close reading)が求められる。しかし、こうした日本的な「精読」を海外で行うのは困難である。というのも、海外の多くの図書館に日本と同じ水準で行えるだけの蔵書があるわけではないからだ。たとえば、国立リユブリヤナ大学での日本古典に関する基本的なテキストとは、いまなお日本古典文学大系にとどまっており、日本文学に関する蔵書も本棚換算にして二架のみと聞く。

かような現状を踏まれば、日本的な「精読」も決して「当たり前」にあるものではない。「精読」という方法も日本という特権的な場であるからこそできる研究ではなかったか。

ならば、対案を示せと、具体的な方法をとにかく多くが求めたがる。しかし、方法とは、日本とは別のアジアの国々や南米、中東あるいはアフリカで「日本文学する」とでもいうべき身振り、あるいは、そうした実践を通じて週及的に見出されるものだろう。

言い換えれば、それはカルロ・ギンズブルグ(『ミクロストリア

と世界史』やジャン・ピエール・ヴェルナン(『形象・偶像・仮面』)も引くジョルジュ・デュメジルが伝えるマルセル・グラネのいう「方法」——「方法というのは、人が通り抜けたあとでできる道」——においてであろう。

とはいえ、もともと「道」があるわけではない。「歩く人が多くなれば、それが道になり、それ

シンポジウム報告①

日本文学会主催のシンポジウム

「日本語文法研究の射程—テキスト・文体・文学との交差—」

日本文学科教授 澤田 淳

二〇二四年九月六日(土)に、青山キャンパスにおいて、青山学院大学日本文学会主催シンポジウム「日本語文法研究の射程—テキスト・文体・文学との交差—」が開催された。シンポジウムの内容は下記の通りである。

①モダリティ表現の普通体と丁寧体をめぐって——「うたい。」と「うたいです。」を中心に——前田直

を魯迅は「希望」と呼んだ(『故郷』竹内好訳)。日本という中心から提示された、すでに手垢のついた「道」(＝方法)ではなく、日本の外(＝辺境)から「希望の火花」(ヴァルター・ベンヤミン「歴史の概念について」)を散らすこと、そこから日本文学を揺さぶるチャンスを見てみたい。そう、日本とは別の仕方だ。

子(学習院大学教授)

②ソーシャルメディア文体としての「見出し的提題」——メディアに

枠づけられる文法——大江元貴(青山学院大学准教授)

③文体と教育——森山卓郎(早稲田大学教授)

④敬語から見る物語テキストの文体と視点——澤田淳(青山学院大学教授)

⑤創作から翻訳へ／翻訳から創作へ——村上春樹を例に——金水敏

(放送大学大阪学習センター所長
／大阪大学名誉教授)

⑥大規模言語モデルの記述文法研究
応用について―ジャンルとの関
わりから―近藤泰弘(青山学院
大学名誉教授)

①では、日本語学習者と日本語
母語話者とで、「したい。」と「
たいです。」の使い分けの原理が
異なっている点や、様々なコーパ
ス調査から実証的に示された。ま
た、日本語の文法研究において、
普通体と丁寧体ごとのきめ細やか
な記述が必要であるという提言が
示された。

②では、X (Twitter) の文体
を特徴づける表現とみなされてい
る無助詞提題文について文法的
な視点から考察がなされた。具体
的には、Xにおいては口頭会話で
の使用のみを射程していた従来の
研究からは予測されない文環境で
無助詞提題が使用されているこ
と、その使用のあり方が記事の見
出し文と類似していることが明ら
かにされ、文法のあり様がメデイ
アの特性と密接に結びついている
ことが示された。

③では、「文体」の類型化にあ
たって、文法的な特性、伝達関係

の特性、メディアの特性、社会的
位置づけを考慮に入れた整理が必
要となる点が示された。また、文
法的な言語表現に相関させた具体
的な文体の類型を提示すること
で、国語教育への貢献が可能であ
る点が示された。

④では、日本語の物語テキスト
の地の文における素材敬語の加除
と、語り手の視点の移動の相関に
着目した考察がなされた。具体的
には、地の文に素材敬語が現れな
い文体を標準的な文体とする近現
代の物語テキストでは、地の文に
「素材敬語を付ける」という言語
的操作が、登場人物の視点からの
描写であることを示す言語的手法
となっている点が示された。

⑤では、村上春樹の作品を例に、
日本近代における文学の話体と翻
訳の話体の関係について考察がな
された。具体的には、翻訳話体が
近代小説話体と一定の距離を取
り、現代の日本ではない世界とい
う、独自の言語空間を作り出す機
能を得るようになった点が確認さ
れた。また、村上作品に多く見ら
れる「言いさし+ネ」構文が外国
語の翻訳の過程で生まれた工夫で
あった点が示された。

⑥では、日本語の文が大規模言
語モデルの埋め込みベクトルか
ら、エゴセントリックな文とアロ
セントリックな文に分類できる点
が示された。さらに、日本語では、
敬語、役割語、終助詞などが、伝
えられる情報に、発話者のエゴセ
ントリックな「重み」を加えるこ
とで事実伝達以上の情報を伝える
ことが可能となっている点が示さ
れた。

いずれも、これまでの日本語文
法研究の射程を大幅に広げるよう
な新知見に富んだ内容であった。
最後の全体討論では活発な質疑応
答や意見交換がなされた。本シン
ポジウムの成果を収めた書籍の刊

行も予定されている。



シンポジウム報告②

講演会

「ポーランド語による初の『源氏物語』全巻訳について」

日本文学科准教授 山口 一樹

本学科では二〇二四年七月十三
日(土)にポーランド国ワルシャ
ワ大学東洋学部日本文学科教授・学

科長のイヴォナ・コルデインスカ・
ナヴロツカ先生をお招きし、「ポー
ランド語による初の『源氏物語』
全巻訳について」という題目でご
講演をいただいた。ナヴロツカ先

生の、専門は主に平安と江戸時代の古典文学と文化であり、『源氏物語』を始めとする日本古典文学の研究、翻訳のほか、現代日本の文化風習や食文化などにも造詣が深い。博士論文を元にした著書『日本王朝恋愛』(*Japońska miłość dworska*, Trio, 二〇〇五年)のほか、『浮世』井原西鶴の作品における町人文化』(*Ulotny świat ulicy, Obraz kultury mieszczańskiej w twórczości Ihary Saikaku*, WUW, 二〇一〇年)、『日本食文化』(*Japońska kultura kulinarna*, Trio, 二〇一八年)や、『日本古典文法』(*Klasyyczny język japoński*, WUW, 二〇一三年)など、多数の著書が出版されている。本学日本文学科が二〇二三年に刊行した『文学交流入門』(武蔵野書院)にも、「ポーランドと日本との文学交流」という記事を寄稿いただいている。

『源氏物語』は日本の古典作品の中でも屈指の傑作と目され、多数の外国語訳が刊行されているが、ポーランド語による全巻訳は未だおこなわれていない。そうした中、ナヴロツカ先生はポーランド政府の国家プロジェクト

「National Programme for the Development of Humanities」に採択された研究課題として、初のポーランド語による全巻訳の作成を進めておられる。講演会当日は、まず世界文学史における『源氏物語』の位相についてポーランドの哲学者・文学者であるローマン・インガルデンの文学理論を参照しながら論じられ、そのうえでポーランド語による全巻訳を遂行するために肝要と考えておられる点をお話いただいた。

世界文学史における『源氏物語』の位相に関しては、まず文学の「傑作」の要件として、(1) 特定の時代を超越する「内容」、(2) 作品のジャンルの特徴が理想的に実現した「形式」、(3) 他文化的領域等にも大きな影響を与える「世界文化の中における当該国の位置(存在様態)」を挙げ、これらの要件を『源氏物語』が満たすことを指摘しておられた。とくに(2)について、語り手や作中人物たちの発話や内話からなる『源氏物語』の語りの形式を取り上げておられるのが興味深かった。インガルデンの文学理論については、「疑似判断説」中の「形而上学的性質」(文

学表現のうえに現れる「美的価値」)の「具体化」(読者による読み取り)が『源氏物語』の場合にも指摘できることを、本居宣長『紫文要領』等に触れながら説いておられた。現代に至るまで多様な「読み」を生じさせた『源氏物語』の特色がポーランドのインガルデンの理論に結び付くことが新鮮に感じられた。ポーランド語による全巻訳に関しては、単に原文に忠実であるだけでなく、ポーランド人にとって親しみやすく、平易な訳文を作ることが重要であると述べておられた。翻訳のうえで問題になり得る点として、作中人物の呼称や主語の訳出、言葉の多義性への配慮、和歌の記載、文化関連語彙の扱い等を挙げておられ、翻訳者としての使命は「異文化交流、異文化コミュニケーションの媒介者」たることにあるとされていた。

表現の背景にある文化の相違等、外国語訳を作成するうえでは様々な難点があることにも気付かされたが、ポーランド語訳の完成がいつそう待ち望まれるお話であった。

講演後の質疑応答はオンライン会議システムを併用する形で行わ

れ、翻訳の具体的な作業やポーランド国内の日本古典への関心、先生ご自身の『源氏物語』観等、多数の質問・意見が寄せられた。ナヴロツカ先生のご講演および質疑応答の内容については、文学通信社より講演録が刊行される予定である。ご一読願いたい。

研究レポート

堀辰雄の「身のしまる」

―戦時下の新聞報道から―

二年 岩永 実津穂

堀辰雄の作品に、奈良と長野への旅行記である『大和路・信濃路』がある。『大和路・信濃路』は一九四三年から四四年にかけて発表された作品であるが、戦争の記述はない。しかし、戦争は堀の作品に少なからぬ影響を与えている。その実例として、戦時下の堀の書簡と『大和路・信濃路』に共通して現れる「身のしまる」という言葉がある。青空文庫で閲覧可能な堀の作品で「身のしまる」が登場する作品は『大和路・信濃路』だけであり、「身のしまる(緊る)」

が三度現れる。また、一九四五年二月五日付の二通の書簡で、堀は新聞を毎日読んでは「身のしまるやうな切ない」感情を抱いていると述べている。辞書で「身のしまる」を調べるも見当たらなかったため、「身のしまる」は、堀が自身の解釈に基づいて使用していた言葉なのではないかと考察した。では、堀にとって、「身のしまる」とは、どのような意味を持っていたのか。

まず、堀が「身のしまるやうな切ない」思いを感じたという、当時の新聞を調査しようと考えた。そこで、堀の書簡から、購読していた新聞についての記述を探したが、発見できなかった。しかし、一九四五年一月十二日付の書簡に、片岡鐵兵の死去と告別式を新聞で知ったという記述があった。そのため、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、そして堀が疎開・療養していた長野県の日刊地方紙である信濃毎日新聞で、片岡の死去と告別式の記事を探した。朝日新聞、毎日新聞、読売新聞では、片岡の死去と告別式を報じていたが、信濃毎日新聞では告別式の記事は発見できなかった。そのため、少な

くとも、堀は朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の内のいずれか、もしくは複数を購読していたと考えられる。一九四五年の国勢調査が中止されているため、当時の日本国内で購読されていた新聞の比率は不明である。そのため、一九四五年当時、東京朝日で一日百四十万部以上が発行されており、世論に一定の影響力があつたであろう朝日新聞に注目した。中でも、片岡の告別式の記事が掲載された一九四五年一月から二月までの記事を概観した。紙面では、値上げや銀の供出を呼びかける記事が散見され、市民生活に戦争の影響が如実に表れていると分かる。さらに、空襲やB29といった単語も頻出し、本土への攻撃が頻繁に行われていたと考えられる。一方で、戦死者が写真付きで報じられるとともに、特攻隊の記事も確認でき、戦死者を称え、神格化する姿勢が見られる。加えて、紙面には、堀も名を連ねた日本文学報国会の活動に関する報道もあり、国威発揚に文学が利用されていたことが分かる。

これらの新聞報道からも、『大和路・信濃路』が執筆された背景

には、殺伐とした社会風潮が推察されるが、作中では、戦争中に書かれたとは思えないほど穏やかな時間が流れており、主人公には、長野県で静かな生活をしていった堀との共通点が見いだせる。しかし、そんな長閑な旅路にも関わらず、主人公は生と死について思索し、「身のしまる」ような思いを感じている。これらの描写は、堀が、新聞報道に現れた戦時下の死生観や社会の変化に影響されたものではないか。『大和路・信濃路』に現れる「身のしまる」や、書簡にある「身のしまるやうな切ない」感情とは、戦時下でありながらも、戦場や銃後と一歩離れた場に身を置いていた堀の、世の中の雰囲気に対する違和感の形容であつたと考えられる。死が常態化し、礼賛された戦時下で、堀が新聞報道から感じた、死に対する感覚が麻痺していくことへの恐怖、政府や隣人同士による監視が厳しくなることの圧迫感、犠牲者への哀悼が、堀の「身のしまる」には内包されている。

参考文献

長野県編、一九九〇、『長野県史

通史編 第九卷（近代三）』、長野県史刊行会。

堀辰雄、一九九七、『堀辰雄全集 第八卷』（中村眞一郎・福永武彦編）、筑摩書房。

堀辰雄、一九六一、『日本現代文学全集 第七六（堀辰雄集）』（伊藤整・亀井勝一郎・中村光夫・平野謙・山本健吉編）、講談社。

山本武利、一九八一、『近代日本の新聞読者層（叢書・現代の社会科学）』、法政大学出版局。

交換留学生レポート

『吾輩は猫である』に潜むカーニバル的諸相

香港中文大学（深圳） 馬 楚萱

夏目漱石『吾輩は猫である』（以下、『猫』）は、猫の視点を通じて人間社会の滑稽さを鋭く描いた作品である。この作品を、ミハイル・バフチンが提唱した「カーニバル理論」の観点から解釈することにより、その批評性が鮮明になる。

カーニバルとは、中世ヨーロッパの祭典であり、社会秩序や身分制度が一時的に取り払われ、神聖

さや権威が冒瀉される場である。バフチンは、このような場が文学に表れるとき、既存の価値観を覆し、自由で無秩序な関係が生じる「カーニバル化」が起こるとした。

『猫』には、秩序が逆転するカーニバル的要素が散見される。

本稿では、許慧敏（2020）氏による『猫』のカーニバル性に関する先行研究を参照しつつ、語りの構造、世界観の転倒、言語表現という三つの側面から本作のカーニバル的要素を考察していきたい。

『猫』の語り手である名無しの猫は、人間社会の主流から外れた「余所者」として描かれている。この立場ゆえに、猫は現実世界とカーニバル的な空間を行き来するのである。許氏は、「猫は社会との実質的な関係を持たないからこそ、自由に現実の秩序を嘲笑し、カーニバル的な批評を展開できる」と指摘する。実際、「吾輩」は金田の西洋館など人間社会の異なる場所に自由に出入りし、人間の行動を観察しつつ風刺し、滑稽さを批判することに徹している。『猫』の語りは、真と偽、厳粛と滑稽が曖昧になる両義性を持ち、

カーニバル的な批評性を表現しているのである。

『猫』では、神聖なものが卑俗に転じ、権威が転倒する描写が随所に見られ、これはカーニバル文学の典型である。カーニバル文学は「正統的現実世界」を覆そうとし、許氏は「物質・肉体化」の概念を用いて、神聖なものが物質や肉体に転化する描写が階級制度を覆す役割を持つと指摘する。例えば、苦沙弥先生がアンドレア・デル・サルトを模倣し「吾輩」の像を描こうとする場面では、芸術という高尚な行為が、猫にとっては滑稽なものに見え、最終的には尿意といういわゆる汚いものによって集中が切れることで、高貴な行為が物質的に否定されるのである。既存の秩序や価値観が転倒されることで、社会の矛盾が浮かび上がるのである。

筆者は、これを「旧世界と新世界の地位の交代や更新」として捉え、カーニバル的な混沌状態が生じると考える。猫は不完全で信頼できない語り手であり、その両義性によって、秩序と無秩序の境界が曖昧になり、笑いと風刺をもつて社会の価値基準が揺さぶられる

のである。

修辭的構造の面においても、

『猫』はカーニバル的表現が顕著である。「吾輩」は猫でありながらも、人間の言語を操り、古語から英語、俗語、数学や仏教用語が混在する語りによって、社会階層や文化境界を崩し、誰もが平等な存在であるというカーニバルの理念と合致する。また、誇張や反語といった表現も多用されており、権威や価値を逆転させる手法が効果を上げていく。『猫』の語り口は、崇高なものを卑俗に、下賤なものを尊くするというカーニバル的転倒の効果を強調しているのである。

『吾輩は猫である』は、バフチンのカーニバル理論の観点から再評価するに値する作品であると言える。漱石がバフチンの理論を知っていたわけではないが、猫という異化された視点を通じ、既存の秩序を崩壊させる構造がある点において、共通する文学的效果を持つ。『猫』が時代や国境を超えて読み継がれる理由は、まさにこうした普遍的なカーニバル性が込められているためであり、現代的な視点からも再解釈する価値があ

ると考えたい。

参考文献

Bachtin, M., & Emerson, C. (1984). *Problems of Dostoevsky's poetics*. University of Minnesota Press.

許慧敏「夏目漱石『我是猫』的狂歡化文体特徵探析」『文学芸術』2020年14巻、97-98頁。

キール国立大学・リュフ リヤーナ大学との学生交流

日本文学科教授 小松 靖彦

日本文学科では、日本文学科生とウクライナのキール国立大学人文・教育芸術院極東および東南アジア言語文学科日本語専攻、スロベニアのリュブリャナ大学文学部アジア研究学科日本研究専攻の学生たちの交流を進めています。

二〇二四年度前期には、「日本文学演習Ⅰ」[1]（小松担当）で、それぞれの大学の学生と協働授業をオンラインで行いました。後期には、三大学の学生によるオンライン「俳句の会」を実施予定です。

キーウ国立大学との協働授業

青山学院大学はキーウ国立大学と二〇一〇年に協定を結び、二〇一八年までに七名の留学生を受入れてきました。その後、留学生が途絶え、さらに二〇二二年二月からロシア連邦によるウクライナ侵攻が始まり、留学生の派遣が困難となりました。戦時下にあっても研究・教育の灯を絶やすことのないキーウ国立大学に対して、協定校としてできることは何かを考え、協働授業を開催しました。

第一回はハグループに分かれて、自己紹介後、日本のアニメーションや歌、さらに日本文学やウクライナ文学に関して、互いに関心あることについての意見交換。青山学院大学側から『萬葉集』や尹東柱（ウクライナでは韓国文学にも高い関心が持たれています）について紹介したり、キーウ国立大学側からリナ・コステンコなどウクライナの現代詩人を紹介したりするグループもありました。

第二回では、互いに紹介したい日本文学・ウクライナ文学について、ハグループに分かれてそれぞれプレゼンテーションを行いました。女性作家、教科書に載る作品、

ウクライナにおける虐殺の歴史に取材した文学などについて紹介がありました。過去の同じ時代の社会状況が日本文学・ウクライナ文学両方に強い影響を与えていることや、ウクライナにおいて芸術家が強い影響力を持っていることなどが議論されました。戦争が文学に与える影響も、大きなトピックとなりました。

リュブリャーナ大学との協働授業

青山学院大学文学部日本文学科はリュブリャーナ大学文学部アジア研究学科と二〇一七年二月に学術協定を締結しました。二〇一八年一二月にはアジア研究学科日本研究専攻の教員・大学院生・学部生を招いて、「ことばの身体性」をテーマとする交流行事を開催しました。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大のため、交流は中止。今回の協働授業で交流が復活しました。

協働授業では、両大学の学生が作る七グループが各々「秋」「子ども」「動物」「龍」「戦争」「推理小説」「旅」をテーマに、日本文学・韓国文学・スロベニア文学・セルビア文学・トルコ文学・フランス

文学の比較研究を行いました。

第一回は、互いの関心を確認したのち、第二回のための準備。

第二回では、①セルビア文学・

スロベニア文学・日本文学でも

「秋」は美・愛・死を関わりつつ

時の流れを象徴していること、②

日本に一休さん、トルコにナス

レディン・ホジャさんという「と

んち」の名手がいること、③日本

文学・スロベニア文学の鳥の役割

の違いや、トルコ神話では灰色狼

韓国神話では虎が王家の始祖であ

るといふ共通性が指摘されました。

また、④日本文学とヨーロッパ

文学でも龍が善悪の二面性を持つ

こと、⑤第一次世界大戦のイゾン

ツォ戦線をめぐるスロベニアの作

家プレジホフ・ヴォランツとアメ

リカの作家ヘミングウェイの描写

の違い、日本とスロベニアの軍歌

の違い、⑥フランス・日本間の推

理小説の共通点、⑦日本文学・ス

ロベニア文学の旅行記の自然描写

の違い、また西洋を訪ねた森鷗外

が日本文学に、日本を訪ねたアル

マ・カルリンがスロベニア文化に

与えた影響などが論じられました。

就職活動

みなさんへのメッセージ

「人を助く、日本文学科での学び。」

卒業生 石川 愛果

社会人2年目の慌ただしい毎日の中、この原稿の執筆依頼をいただき、大学生活にあたたかい懐かしさを覚えます。拙筆ですが、私の話がみなさんの就職活動に少しでも役立てば幸いです。

私は現在、出版社で雑誌の編集者として働いています。大学在学中は、何となくメディア関係の仕事につきたいとは考えていたものの、日本文学科で学んでいることが就職活動でどのように評価されるのか、はじめのうちはあまりイメージがでない日々でした。

2年生の頃、コロナ禍に突入しました。授業は全てオンラインになりました。授業は全てが排除されていく中、ますます就活に不安が募るようになりました。

そんな中、1年で1冊の本を作る授業を受講しました。オンラインで班員と企画を立て、マスクをして取材に赴き、なんとか1

今の私の仕事は、誰かの好きなものや面白そうなことを探して媒体ならではの企画にし、取材・撮影をして、構成を考え、雑誌にすることです。文学に関する企画が通ったり、詩人の連載の担当編集を任せてもらえたりと、大学で学

卒業生
田中
桃香

こんにちは。文学部日本文学科卒業生の田中桃香です。私は四月から、地方公務員として政令指定都市で働いています。公務員としてまだまだ勉強の日々ですが、私の経験が、少しでもみなさんの就職活動の参考になれば嬉しいです。

公務員試験は科目が幅広く量も多いため、進捗状況に悩むことも
あるかと思います。

實際、私は二月後半の模試で、必要な点数の半分もとれず、一番下の判定でしたが、毎日必死に勉強を続けると一、二ヶ月後には自分でも驚くほど点数が取れるようになっていました。一つの結果で一喜一憂せず、これまでの積み重ねを信じ、最後まで諦めず続けて

私は公務員試験を通して、以前より自信が持てるようになり、苦手を克服することができました。

就職活動は、人それぞれで先が見えず、不安な日々だと思います。しかし振り返ってみると、これでもかというくらい自分自身と向き合える貴重な時間でした。例えば結果として公務員にならなかったとしても、これらの経験は、自分にとって意味のあることだったと私は考えます。

私の経験が誰かの励みになれば幸いです。応援しています。

「就職活動【教員】」

卒業生 日向野 真歩

私は幼い頃から先生になりたいと周囲に話しており、大学入学の目的も教員免許を取ることでした。教員採用試験の勉強は大学3年生の夏頃から筆記試験対策、論文対策を中心に、年明け頃からは面接対策を進めていきました。大学4年生の6月に教育実習に行くことが決まっていたので、早め早めに一次試験対策を進めていました。実際に4月から教員として過ごして毎日身にしみて感じていることは、今までの自分の経験全てが教員としての土台を作っているということです。

私は、高校を卒業してから大学に入学するまでに二年間かかりました。やっとの思いで入学が決まったかと思うと、待ち受けていたのはコロナウィルスの流行です。思い描いていた学生生活とは全くもって違うものでした。高校時代の同級生は就職活動を始めている中で自分は慣れない履修登録

に頭を抱え、遊びに行くこともアルバイトを始めることもできなかったあの頃は大変苦しいものでした。しかし、高校教員として働き始めるとこの経験が他の人があまり経験したことがない貴重な経験であり、進路で悩みこれから何をしたいのかを考える高校生たちにとって、『先生もこんな風に悩んで進路を決めたんだ。他の人よりも時間がかかってもいいんだ。』とそんなことを感じてもらえた経験になっています。

生徒と過ごす時間は予想外なところばかりで、毎日あつという間に過ぎて行きます。日々の授業、部活動、廊下を歩いている際に声をかけられ立ち話で数十分、やらなくてはいけないことに手を付けられたのは夕方以降なんて日もあります。教員は今、労働時間や給料など多くの問題が指摘されています。しかし、実際に働いてみると教員として働いている人にしかわからない多くの魅力があります。教員人生が半年の私はまだまだ学ぶことばかりで、毎日悩みや反省で考えこんでしまうこともしばしばで、大変なことばかりです。でも、毎日元気いっぱいに話をして

くれる生徒、授業中にたくさん発言して頑張っている生徒、学校に行きたくないと話してくれた生徒からの「先生がいるから学校来た」などの言葉、毎日成長していく高校生を身近で見守ることができこの仕事はとてもかけがえのない仕事だと思っています。

教員を目指している皆さん、すでに完成された教員でいる必要はありません。若い教員だからできることがあり、どの先生たちも多くのことで悩み続けています。正解がある職業ではありません。私自身も生徒に助けてもらい成長を続けていく途中です。ただ「教員になりたい」そんな気持ちがあればきっと大丈夫です。いつか教員として皆さんと出会えることを楽しみにしています。

大学院に進学して

博士前期課程一年 堤 友香

今春、大学院への進学を果たし、日本語・日本語教育学の道へと踏み出しました。実は学部4年生の時点で、進学を迷っていた時期もありました。しかし、本学の先

取り履修制度を利用して大学院の授業を体験したことが、修士課程への進学を決意する大きなきっかけとなりました。その時に体験した授業の雰囲気や学びの深さに魅了され、より専門的な研究の世界に飛び込みたいという思いが強くなっていったのです。

大学院での学びの特徴は、対話を通じた知識の構築にあると考えています。学部時代は先生方から知識を学んでいく講義が中心でしたが、大学院では少人数での討論を通じて、先生方と共に考えを深めていく機会が多くあります。特に、日本文学や日本語・日本語教育の分野では、明確な正解が存在しない問題について議論を重ねることも少なくありません。そういった「正解のない問い」について、先生方や先輩、友人たちと意見を交わしながら答えを模索していく過程に、大きな面白さと学びを感じています。また、少人数制の授業形態は、先生との距離が近く、きめ細かな指導を受けられる点で非常に魅力的です。

研究環境の面でも、充実した日々を送っています。今年から新しくなった図書館は、より快適な

夏期集中講義報告

夏期集中講義で学んだことについて

一年 鈴木 さくら

学習空間となり、長時間の研究活動も苦になりません。学部生時代から先輩たちの話を聞いて憧れていた院生専用の研究スペースも与えられ、自分だけの机で研究に没頭できる環境を手に入れたことで、モチベーションも大きく向上しました。

入学当初は1年での修了を目指していましたが、研究を進める中で、もっと深く掘り下げたい課題が次々と見つかり、7月ごろ2年での修了に切り替えました。計画変更に伴うトラブルもありましたが、2年間かけて修士論文に取り組む決断をしたことで、より充実した研究活動が可能になったと感じています。

大学院での日々は、新しい発見と挑戦の連続です。時には壁にぶつかることもありますが、先生や先輩方からの的確なアドバイスを支えられ、一つ一つの課題を乗り越えています。これからの研究生活を通じて、日本語・日本語教育の分野でより深い知見を得られるよう、日々精進していきたいと考えています。

今年度は鈴木千恵子先生より「連句」について、グループワークや映像視聴を交えながら実践的に学んだ。連句や俳句といったものを主とした本講義は日本文学科生におすすめるしたい講義であるが、実際の講義には他学部の生徒も多く、専門的な知識がなくても理解できるような構成にしてくださっていた。夏期集中講義による三限連続の構成であったため、一限の講義で学んだことをその日の三限の実践で生かすことができ、聞くだけの講義より多方面から「連句」というものを深めることができた。

さて、まず学んだのはそもそも「連句」とは何かということである。普段日本文学に触れない人は聞きなじみのないものであろう。かくいう私も実際に講義を受けるまで耳にしたことがなかった。一般的に知られる「俳句」との大きな違いは、連句は五・七・五で構成される長句（奇数句）と七・七で

構成される短句（偶数句）を交互に重ねていくことである。我々が「名句」と認識している「俳句」もこの「連句」の中の一つであることも珍しくない。この連続することには「前句から進展させる」とことと「前句と相違、変化があるようにする」ことが求められ、その他にも制約がある。こう聞くと難しいことのように思えるが実際に体験するとそれほどハードルの高いことではなく、提出された句を選出・添削する「捌き手」がいることで素人でも引っかけなく行うことができた。また、連句の中には「花」と「月」を入れなければならぬ句があり、これが「花をもたせる」という言葉の語源であったりする。さらに連句の最後の句は「挙げ句」と呼ばれ、これは「存じ」「挙句の果て」という言葉の語源である。

続いては、YouTubeを主とした反転授業で「連句」というもののバリエーションを学んだ。詩人、ラッパー、落語家など連句に初めて触れる人が、連句を構成していく一座である「連衆」に加わり連句を体験してみたいというものである。連句には前述の通り、句ごと

や形に制約があるものの、その制約にはかなりのバリエーションが許されており、ラッパーの参加する連句ではラップになぞらえて前句と韻を踏むことがルールづけられたり、さまざまな職業から集められた若者が参加する連句では井上陽水の歌を句に関連付けたりと、古典を敬遠しがちな若者でも興味を持ちやすい内容となっている。またよく知られている「短歌」「古典」で使われるような古語である必要もなく、動画の中の連句でもカタカナ語や擬音を多用するなど堅苦しいだけではないものであった。

最後に、生徒たちで実践的に連句を作ってみる時間があった。連句の始まりとなる「発句」には実際の松尾芭蕉の句を用い、十人前後で「連衆」を組んで一句ずつ連句を完成させた。「捌き手」を務めてくださったのは鈴木先生で、アドバイスをもらいながら楽しく連句を経験することができた。自分以外の人が作った前句はどのような表現と言葉を使っているのかを知ることができ、新しい発想を生み出すことができる。また連句の一番の特徴として複数人で一つの連

句という作品を作ることを目的とするため、連句の続きが自分の思っていたものとは違ったものになる意外性が楽しい点である。

このような講義や実践のほかにも、俳句の穴埋めなど短歌に詳しくなくとも楽しく取り組める工夫が至る所にあり、非常に有意義な講義であった。現在ではオンラインなど気軽に連句を体験できるところもあり、このような講義を通して連句や古典を楽しむ輪が広がって「古典」というものに注目がさらに集まることを願う。

留学生の動向

日本文学科教授 大屋多詠子

二〇二四年五月現在、本学に留学している私費留学生は四百二十四名、うち文学部全体では七十二名、そのうち日本文学科は三十一名です。全学部全学科を見渡しても、総合文化政策学部総合文化政策学科の三十五名に次いで二番目に留学生が多い学科となっています。国籍では中国が最も多く、次いで韓国です。今年度は新たに七名の私費留学生が入学しました。

大学院では博士前期課程に私費留学生が三名、博士後期課程に国費留学生が二名、科目等履修生が一名在籍しています。

コロナ禍以降、文化交流活動がなかなか開催できませんでしたが、今年度は十二月八日に開催することができました。三浦真尋さんを中心に岩永実津穂さん、内山愛梨さん、小高知也さん、小林愛佳さんが力を合わせて、企画から運営まで一所懸命考えてくれました。今回は浅草散歩と和菓子作り体験を行いました。まず浅草寺の賑わいを楽しんだ後、和菓子作りでは「寒牡丹」と「サンタ」の和菓子をどちらか選んで挑戦、自ら点てたお抹茶と味わいました。その後は牛嶋神社、三囲神社を参詣、すみだリバーウォークからの景色を堪能しました。遅めの昼食ではもんじゃ焼きで盛り上がりしました。教員を含め、十人のこじんまりとした会になりましたが、例年とは異なる体験型の活動でより親密な対話もできたと思います。

留学生が多い学科として、今後、より留学生に向けた企画を充実させていく必要があります。今回のような体験型の企画も有効でしょう。

う。少人数の参加しか見込めなくとも、まずは機会を増やすことが重要です。今後の課題です。

最後に今年度のチューターの皆さんからのメッセージです。留学生の皆さんもそうだと思いますが、教員も大変助けられました。感謝しています。毎年秋に国際センターが次年度のチューターを募集しています。国際交流や異文化に関心のある方はぜひ応募して下さい。

留学生チューターを務めさせていただいたことは、とても意義深い経験になりました。留学生の方に私が教えるというよりも、私が教えていただいていると思いが、活動しておりました。この活動が、留学生の方の一助になったのであれば、幸いです。

(岩永 実津穂)

チューター活動によって誰かをサポートすることの喜びを知ることが出来ました。また国の違う学生がどのようなことに困っているのか知ることが出来たのもとても良い経験になりました。この活動は他の方をサポートする時にも活かせると思います。チューターを任せて頂きありがとうございます。

た。

(内山 愛梨)

チューター活動を通じて留学生と交流を持つことができたのは、とても貴重な経験でした。実際に留学生の方のお手伝いをさせて頂く中で、不安なこともありましたが多くの学びを得ることができました。ぜひ他の学生の方もチューターに参加して頂きたいと思います。

(小高 知也)

チューターという形で留学生の方々と関わることでできたのは私にとって貴重な経験となりました、ありがとうございました。不安なこともありましたが留学生の方と共に学ぶことができました。ぜひ他の学生の方にもチューターに応募してもらえたらと思います。

(小林 愛佳)

チューター活動を通して色々なルーツを持つて今、共に学ぶ仲間がいるのだと感じました。留学生の皆さんの多言語の流暢さや多文化に渡る知識の豊かさに驚き、多くの刺激をいただきました。一年間チューターとして活動させて頂きありがとうございます。

(三浦 真尋)

今年度の学生の活躍

【二〇二四年度青山学院大学学業成績優秀者表彰】

◇学部最優秀賞 鈴木麻友(四年)

◇学部優秀賞 上田桃華(三年)、大串僚芸(二年)

◇学部奨励賞 栗津伶菜(四年)、登坂佑菜(三年)、櫻井優菜(二年)

◇大学院最優秀賞 新田杏奈(三年)

【第37回夕暮祭短歌大会(神奈川県秦野市、秦野市教育委員会主催)】

◇佳作 玉井萌々華(二年)

古本にふわり漂う時間(とき)の香どんな手のひらを旅してきたのか

◇佳作 小林愛佳(二年)

冬曉踏み出せぬまま閉じたドア本を枕に芽吹く日待つつ

【紫式部ひとり文芸ミュージカル短歌賞】

◇佳作 玉井萌々華(二年)

干し布団陽だまりの香を焚きつけてかの母のように私を包む

【第11回福岡女学院短歌コンクール「今をうたう」】

◇入選 玉井萌々華(二年)

青空を独り占めして手を伸ばす回りに誰もいないこのとき

◇入選 高橋琴音(三年)

ただ少し空が痛くて、両の手をかざして逃げる小さな影へ

【第18回全日本学生・ジュニア短歌大会(日本歌人クラブ主催、文化庁・毎日新聞社・東京都教育委員会後援)】

◇高校生・大学生の部 優良賞 岩本煌(二年)

全体重すべてを懸けて鍵盤を走る指先が放つ「月光」

◇同 優良賞 海老原風流(三年)

言葉はね、油性マーカーなんだって。消そうとしても消えやしないの。

【第9回田舎館村『田んぼアート』短文芸コンテスト(田舎館村田んぼアート短文芸コンテスト実行委員会)】

◇入選 山口瑠雅(三年)

新米に新紙幣に田舎館のグレートウェーブな北里の顔

【詩の街ゆざわ二〇二四第13回「短歌会」(ゆざわ小町商工会女性部主催、湯沢市、湯沢市教育委員会、一般社団法人湯沢市観光物産協会、湯沢市雄勝観光協会後援)】

繋いだ手あったかいねと言えるからちよっと便利な末端冷え性

《二〇二三年度》(学年は当時)

【第29回「前田純孝賞」学生短歌コンクール(兵庫県新温泉町・新温泉町教育委員会・神戸新聞社主催)】

◇大学生の部 準前田純孝賞 海老原風流(二年)

衣替え夏の支度はできたからブツクカバーも水色にする

◇同 選者賞 平山香月(二年)

幸せに匂いはあるのと問う君に籠いっぱいのパンを焼く朝

◇同 新温泉町長賞 谷口茉莉(三年)

ビルの間で窮屈そうに沈む陽がまんまるのまま見えたふると

◇同 新温泉町教育長賞 剣持瑚亜(三年)

惜しみつつ静かな朝の食パンに君が残したいいちごジャム塗る

【第3回「青山俳壇」(青山学院)】

◇優秀賞 本多達郎(三年)

日本語・日本文学・日本教育・中国古典文学等に関する図書を紹介します。未掲載の図書については情報をお寄せください。

《二〇二〇年》(追補)

◆波田野節子訳、李光洙「無情」(平凡社ライブラリー)(平凡社、六月)

◆波田野節子他「韓国文学を旅する60章」(エリアスタディーズ)(明石書店、一二月)

《二〇二二年》(追補)

◆遠藤星希解説「茶をうたう 朝鮮半島のお茶文化千年」(CHON、三月)

《二〇二二年》(追補)

◆土方洋一・大類隆明・小川剛央・粕谷剛史・杉村千亜希・竹内宙明他「言語文化」(高校用教科書)(文英堂、四月)

《二〇二三年》(追補)

◆土方洋一・大類隆明・小川剛央・粕谷剛史・杉村千亜希・竹内宙明他「古典探究」(高校用教科書)(文英堂、四月)

《二〇二三年》(一二月)

◆永池健二編「女性の力から歴史をみる 柳田国男「妹の力」論の射程」(アジア遊学一九〇)(勉誠社、一二月) ◆佐伯真一「熊谷直

日本語専攻卒業生が出版した

日本語・日本文学・日本教育・中国古典文学等に関する図書を紹介します。未掲載の図書については情報をお寄せください。

《二〇二〇年》(追補)

◆波田野節子訳、李光洙「無情」(平凡社ライブラリー)(平凡社、六月)

◆波田野節子他「韓国文学を旅する60章」(エリアスタディーズ)(明石書店、一二月)

《二〇二二年》(追補)

◆遠藤星希解説「茶をうたう 朝鮮半島のお茶文化千年」(CHON、三月)

日本文学科関係書籍

*二〇二三年一月から二〇二四年一月までに出版された日本

文学専任教員(旧教員も含む)、

日本文学科および大学院日本文

学

実』（ミネルヴァ書房、一二月）
《二〇二四年》

◆帆船基生他『サンリオ出版大全』（慶應義塾大学出版会、二月）◆
亀井ダイチ利永子他『英文詳説日本史 JAPANESE HISTORY for High School』（山川出版社、三月）
◆波田野節子訳、李人植『血の涙』（光文社古典新訳文庫）（光文社、六月）◆武藤元昭監修・檜山裕子・藤井史果他『人情本入門 天保期、江戸に開花した娯楽小説』（花鳥社、七月）

院生部会報告

二〇二四年度日大院生部会代表

博士後期課程二年 西澤 駿介

今年度の院生部会に関わる事項について、以下に報告する。

最初に、修士論文中間報告会についてである。今年度は下園理紗、張克儉、大矢真里、卿晨、戴特印颯、中村智貴の六名が研究発表を行った。なお今回は、先取り履修制度を利用し、博士前期課程を一年で修了を目指す院生の発表が行われた初めての年であった。

次に、院生部会代表の交代時期

についてである。これまでの院生部会代表の交代時期は五月となっていたが、これを十月へと変更するものである。特に五月以降は年度初めということもあり、学内の事務的な作業も多く、それに加えて、学会シーズンとも重なるため、院生代表が発表者となった場合、その労は倍増する。院生代表の肩のしかかっているさまざまな役割を少しずつ軽減できる一助となればよい。

ところで、昨年度の「院生部会報告」に新型コロナウイルス感染症以後、希薄となってしまった院生間の交流や院生の主体性を取り戻すような方策を共に考えたいと書きつけた。しかし、それも改善されつつあるようである。たとえば、近代文学を研究している院生が他大学の院生も交えながら、互いの投稿論文を読み合う勉強会が夏に行われたと聞く。また新型コロナウイルス感染症以後、見送ってきた歓迎会が五年ぶりに行われ、院生間の交流も深まりつつある。

さらに、今年度はリュブリャーナ大学、ビツシヨ・パロティ大学、デリー大学、カルフォルニア大学

ロサンゼルス校、カルフォルニア大学アーバイン校から五名の大学院生が交換留学生や客員研究員として在籍している。かれらも巻き込みながらさらなる交流が生まれることにも期待をしたい。

昨年比べて、本部会に新しい風が吹き始めているようである。さらに言えば、その風をつかまえて、そこから新たな試みを創り出してみたい。たとえば、二〇二五年度の年に創刊五〇号を迎える『緑岡詞林』にその試みを形にしてみよう。

新収貴重書紹介

日本文学科准教授 滝澤 みか

二〇二四年六月一二日に本学会会場校に行われた中世文学学会大会に伴い、貴重書展を開催しました。そのときに配布した解題は本学の院生・学生も作成に関わりました。展示までの近年において学科で購入した新収資料については、ここに解題の掲載を以てご報告に代えさせていただきます（『今鏡』は新規購入ではありませんが、新しく今回解題を作成しましたので併せて

掲載いたします）。なお展示の際の備品の借用は図書館・ジェンダー研究センター・大学資料センター各位にお世話になりました。関わって下さった皆様に、心より御礼申し上げます。

『後柏原院御着到集』（二〇二四年二月購入）

写。袋綴二冊。縦二七・七cm×横二〇・四cm。近世前期写。一面一五行。一首一行書。永正六年（二五〇九）九月九日～十二月二十日、明応二年（一四九三）三月三日～五月十四日、年次未詳三月三日～六月十四日、同十一月九日十二月十九日、同三月三日～五月三日、文亀三年（一五〇三）四月九日～十二月十日の計六度の着到百首を所収。（山本啓介）

『称名院集』（二〇二四年二月購入）
写。袋綴一冊。江戸中期写。縦二〇・〇cm×横二二・三cm。外題打付書き「三光院集」。内題なし。奥書なし。歌題の下に歌がある。一面に二二行程度。一首一行。途中に天地が逆になった丁がある。遊紙（首尾二丁）に「安信」と記されている。三条西公条の歌を、「詠百首和歌」などの定数歌も含めて、一冊の形に収めてある。『和歌文学大辞典』（古

典ライブラリー」に従うと、三類の「部立類題と定数歌の集」と分類できるか。(学部四年・北村結子)

『七十一番職人尽歌合絵巻』(一〇二四年二月購入)

写。卷子一軸。下巻のみ。縦二七七cm。江戸後期写か。外題「光信図 職人尽歌合 三巻之内外 住吉内記」。巻末に「七十一番職人尽歌合三巻ノ詞 甘露寺元長卿ノ絵 土佐刑部大輔光信ノ再模ノ住吉絵所」。「住之江文庫」、「戦争関係資料 福島県立図書館 佐藤文庫」の印あり。彩色あり。

(滝澤みか)

『宗祇発句集』(一〇二二年一月購入) 写。列帖(綴葉)装二帖。縦二四・〇cm×横一五・七cm。萌黄色で花文様のある裂表紙。外題なし。内題は第一巻のみ『宗祇日發句』と尾題あり。箱に『宗祇發句集 二巻』とあり。第一帖三十八丁、第二帖六十丁。二帖とも虫損あり。第一帖は一句約五行、第二帖は一句約十行。前遊紙に「伊丹岡田文庫」と「柿衛珍蔵」(どちらも岡田利兵衛氏の蔵書印)、巻末に「月明荘」の蔵書印あり。内容に関しては欠句や句順の違いはあるが、第一帖は『宗祇日發句』(古典ライブラリー『連歌

大観』第一巻16)、第二帖は『自然斎發句』(同左43)と思われる。

(博士前期課程二年・下園理紗) 光悦謡本『西行桜』 093/S2220 (二〇二二年一月購入)

刊。列帖(綴葉)装一帖。縦二四・〇cm×横一八・二cm。一面七行。光悦謡本は、「嵯峨本」「角倉本」とも称される、一群の古活字版豪華本に属する。表紙や料紙の種類により特製本、色替り本、上製本に分類されるが、本作品は表紙にのみ雲母模様を刷り込む上製本と考えられる。『西行桜』は世阿弥作の三番目物あるいは四番目物(どちらにも分類される)で、『山家集』に見える「花見んと群れつつ人の来るのみぞあたら桜の咎にはありける」の和歌に着想を得た作品。五流にある。

(学部三年・田口なでしこ)

『山槐記 三長記 定嗣卿記』 093/S222 (一〇二四年五月購入)

写。袋綴一冊。三作品を合冊。縦二七・〇cm×横一九・〇cm。全六〇丁。平仮名交じり。内題に「山槐記 陣執筆図」(奥書「應永卅二年九月廿日」)、「三長記 建仁元七月八日」、「定嗣卿記 寛元四年四月廿九日」とある。見返し部分に高嶺

文庫、目録部分に「岸本家蔵書」(別印が重なっている)「不忍文庫」「阿波国文庫」の蔵書印あり。屋代弘賢旧蔵。【山槐記】図に対して三行(二行二五・二〇字)程度の説明文がある。【三長記】一面十行(二行二〇字)。奥書に「弘安六年八月八日以一條殿 御本書写校合了」「藤光」の署名あり。【定嗣卿記】寛元四(一二四六)年宝治二(一二四八)年の記事のほか、断片的な記述が現存し、朝儀を中心とした記録となっている。二面六行(二行一五字)。

(博士後期課程一年・内野晴菜)

『今鏡』 913/394/141-10

写。袋綴十冊。縦二六・五cm×横一九・〇cm。外題「今鏡 続世継 校正本 壹」、内題「続世継第二」。第十冊の奥書に「慶安三年孟春仲旬 中野道伴刊行」とある慶安三年(一六五〇)刊行本。平仮名交じり。佐藤有藤竹帛之印・当芸廬屋の蔵書印あり。一面十一行。一十冊は、それぞれ【一】三八丁、【二】四〇丁、【三】三三丁、【四】四〇丁、【五】四二丁、【六】五七丁、【七】四二丁、【八】三三丁、【九】二六丁、【十】二六丁。奥書・奥付に蓬室本・飯田本・龍閣本・塙本・岸本氏取

蔵古抄本・屋代輪池先生本而写之 校合本・平田氏蔵本など複数の本文と対校したことを示す。なお、【九】には「右一卷為定卿筆の本をもて校正しをはりぬ 源弘賢 寛政十年七月六日」と見える。各本に共通して墨(同筆・別筆・朱(別筆)・藍(別筆)の複数人による書入が見られ、『百鍊抄』・『禁秘抄』・『古事談』のほか、日記・歴史物語・詩歌集等の他作品との関係についての注釈も施されている。

(博士後期課程一年・内野晴菜) 『後三年役絵巻』(二〇二四年二月購入)

写。卷子三軸。江戸後期写か。箱入り。縦四五・六cm。外題「後三年役絵巻物 上」。下巻末には、他本にもある、元禄十四年の識語、伊勢貞丈所蔵本の奥書の写しなどが確認出来る他、国会本の朱筆書き入れと本文もある(目黒将史「高知県立高知城歴史博物館所蔵『後三年合戦絵巻』をめぐる」『国文学研究資料館調査研究報告43』二〇三・三参照)。上巻末には「文化十三丙子年孟夏求之」とある。残酷な場面において、全体的に血しぶきなどもふんだんに描かれる。

(滝澤みか)

『保元物語』（二〇二四年二月購入）刊。袋綴一冊（中巻のみ）。縦二七・〇cm×横一九・五cm。二面十一行。五三丁。五一〜五三丁目にかけて欠損あり。外題「平仮名活字本 保元物語 巻中」、内題「保元物語巻中」。題簽の跡が左にあり、その上から外題を直接書いたようである。『青裳堂書店古書目録』に従えば、川瀬一馬『古活字版の研究』にいう元和・寛永中刊十二行本（第五種本）。原表紙の上に、さらに厚手の紙を足して表紙としたか。「残花書屋」の印あり。戸川残花旧蔵。

（学部三年・上田桃華）

『平治物語』（二〇二四年二月購入）刊。袋綴二冊（三巻三冊を一冊に合冊）。版元は松樹軒小川新兵衛。縦二五・二cm×横一八・四cm。貞享二年本。朽葉色の後補表紙。外題は後補かつ書き題箋で、『平治物語』とあり。内題なし。目録あり。第一巻二十五丁、第二巻二十五丁、第三巻二十四丁の合計七十四丁。本文約十七行。「和學講談所」、「温故堂文庫」、「高嶺文庫」の蔵書印あり。本文中、所々に朱で書入あり。

（博士前期課程二年・下園理紗）

『義経記』（二〇二四年二月購入）写。列帖（綴葉）装八帖。縦

二三・四cm×横一六・六cm。紺地金泥表紙。見返しに金箔。外題箋は『義経記』の下に第一から第八（例…『義経記 第一』）とあり。内題なし。目録あり。箱に『義経記』とあり。第一巻三十丁、第二巻五十四丁、第三巻四十八丁、第四巻六十六丁、第五巻六十六丁、第六巻八十三丁、第七巻八十二丁、第八巻四十丁。全巻本文約十行。「三床亭蔵」の蔵書印あり。

（博士前期課程二年・下園理紗）

研究室探訪

武内佳代先生編



*何を専攻し、研究なさっているのですか？

専門は日本近現代文学で、なかでも最初に研究していたのは三島由紀夫文学です。その後、それと並行する形で現代文学を研究しています。対象は女性文学が多いのですが、最近では村上春樹や大江健三郎の文学を研究しています。

*研究内容を教えてください。

具体的に言うと、ジェンダー研究、フェミニズム研究。それからクィア研究という、皆さんが知っている言葉で言うと、いわゆるLGBTQsの問題に着目した研究です。たとえば三島由紀夫文学の場合は、当初は思想的背景を読み取る研究をしていましたが、今は三島文学と女性読者の具体的な関係性について研究しています。じつは三島の長編小説の三分の一くらいは女性雑誌に連載されたものだったということに目を向けて、それについてコソコツと調査や考察を進めています。三島が亡くなってから五十年以上が経っていますが、三島文学の女性読者についてはほとんど研究されてきませんでしたので。これはジェンダー研究、フェミニズム研究に関わる内容です。

それと並走する形で、フェミニズム・クィア批評の観点を中心に、様々

な理論的枠組みを使いながら現代文学の作品たちにアプローチしています。

*その分野を専攻なさったきっかけ、理由を教えてください。

恥ずかしながら、大学生のころ、私はそんなにたくさん小説を読んでいたわけではなく、むしろ哲学に関心がありました。そこで、ゼミに所属する四年生になる直前に「どうしよう」と困って、とりあえず大学の書店で、文学史に出てくる作品を山ほど買い込んで、春休みにコソコツ読んでいました。その中で、一番よく分からないと感じたのが三島由紀夫でした。何か気持ち悪い印象があって、それで三島文学を研究対象にしたのが始まりです。心地の良いものよりも「不気味なもの」に興味があったのでしょうね。ジェンダー研究に関しては、大学に入学した当初はそもそも「ジェンダー」という言葉も知りませんでした。ちょうど三年生になった年に新しく入った女性先生の先生がジェンダー研究について教えてくださいました。関心を抱きました。さらに大学院に進むと、ジェンダー研究の泰斗であるジュディス・バトラーの著作を翻訳した先生が英文科にいて、その

先生からも強く影響を受けました。

***研究をする上で大切にされていることを教えてください。**

いかに自分が文学研究を楽しめるかということ、まず第一にしています。ワクワクが研究の原動力です。次に、先行研究や諸種の文献と誠実に向き合うこともとても大事にしています。そのようにして様々な論者や筆者の知恵を借り、対話することで、新たな知識や視点が得られるからです。それから、これは私の指導教員から言われたことなのですが、自分にしか書けない論文を書く、ということを意識するようにしています。うまくいっているかは定かではありませんが。

***研究されている分野の魅力を教えてください。**

私はもともと様々な学問分野に興味があつて、先ほど大学時代は哲学に関心があつたというお話をしましたが、その前は生物学や物理学も好きでした。大学入学後もそういった分野の本を読んでいて、今でも本当にどれも面白いと感じています。古典や日本語学もとても魅力的だと思いますし、私の研究分野がとくに大きな魅力があるかと問われると、なかなか難しい質問

です。でも、たくさん選択肢がある中から文学を選んだのには理由

があります。たとえば理系の学問や哲学や歴史学などだと、何か確実な「正解」を見つけなくてはいいけないという傾向があるように思えます。しかし私たち人間の心情や生活、社会は本来とても複雑で、たぶん正解がありません。そして文学だけがおそらくそれを最初からきちんと捉えて存立しています。そのため文学研究もまた唯一の正解だけを求めない、つまり色々な正解があつて良い学問分野だと考えています。文学研究では他の学問分野と関わりのある多様な研究手法が許されると同時に、ある解釈を打ち出したとしても、その解釈はもちろん成り立つけれど、別の解釈も成り立ちうるという、いくつかの解が並行して成り立つことがあります。そうした点に、理系という教的に賄える分野や、哲学や歴史学のようにある種の事実や正解を求めていく分野とも違う、より人間の複雑さに迫れる可能性を感じ取って文学研究に魅力を感じ、それを選び取りました。

***研究によって得たものを教えてください。**

人生そのものです。というの、

大切な人間関係を得られたと思っ
ているからです。たとえば残念なが
ら早くに逝去してしまいました。が、
大学の指導教員との出会いはその
後の私の人生を大きく変えてくれ
ました。そのつながりからジュディ
ス・バトラの翻訳者とも出会え
て、そこから同じ関心をもつ友達を
数多く作ることができました。さら
に、大学の教員をやっていると、同
僚の先生方や学生の方々と知り合
えたり、学会活動をすればそこで
もまた様々な研究者と知り合えた
り。そうした人間関係は私の人生
を形作っていると感じています。人
生そのものを研究によって得た、と
いうのはそのような意味です。

***研究に大きく影響を与えた作品があれば教えてください。**

……難しいですね(笑)。好きな
作品と、研究に影響を与えた作品
は違いますし、影響を与えてくれる
作品は年を重ねるにつれて変わって
いくものだと思うので…。あまり一
番を作るタイプではないのですが、
一つ挙げるとすれば村上春樹の『ノ
ルウェイの森』ですね。読めば読む
ほど、研究すればするほどすごいな
と感心します。悔しいですが。

***授業を通して学生に伝えたいことを教えてください。**

「複雑なことを複雑に理解しても
らいたい」ということです。授業で
は単純化して伝えることもありま
すし、皆さんの世代だと、まとめサ
イトやWikipediaのようにまとまっ
ている情報を見て理解することが
多いと思います。しかし先ほど述べ
たように人間や社会は本来とても
複雑で、その複雑な部分を文学は
必要な遠回りをして色々な形で描
いています。私はそれをさらに研究
の形で皆さんにお話しするわけだ
が、その時にすぐに「結局何が言
いたいのか？」とならないでほしいです。
くり返しになりますが、文学とい
うのは唯一の「正解」を見出すよう
な学問ではなくて、人間や社会の
複雑さを垣間見て多角的に思考す
る学問でもあるので。敵と言われる
人びとの中に入ってみればみんな味
方だったとか、美しいと思ってい
たものがなぜか醜怪に見えるとか、
人間社会は非常に複雑で、不可解
で、また不変ではありません。文
学を通して、その複雑なものを
複雑なままに知っていてもいい
です。

***青山学院大学の印象を教えてください。**

ださい。

私は別の大学から来たばかりですが、青山学院大学の学生の皆さんは誠実でとても賢い方々なのに、意外とご自分に自信がないという印象を受けます。間違えることや周囲との軋轢を恐れているという気がします。皆さんすぐできるし、もっと自信を持つことができれば、いくらでも可能性を広げることができません。読書でも、自分でどんな新しい読書体験を切り拓けば良いのに、自信がないせいか、教員に指示されたものばかりを読んでいる感じがします。教員の言うことをよく聞いてくださるのはありがたいですが、授業はともやりやすいのですが、いかにせん物足りなさも感じます。大学ではもっと自信を持つて、主体的に何でも吸収して、自分の考えを主張していつてほしいです。

***先生の宝物を教えてください。**

この年齢になると、周囲に亡くなっている方が多いので、その方々が遺してくれたものが宝物だと感じますね。私が大学教員として就職が決まった時に、指導教員がくださったミキモトのブローチはそのひとつです。それと拮抗するのが、連れ合いの存在でしょうか。

***最後に、学生に向けてのメッセージをお願いします。**

本をたくさん読んでください。先ほど青学生の印象についてお話ししましたが、自信のない人が多いというだけでなく、学年が上がるまであまり本を読んでいない方が多い気がします。また、たとえ量を読んでいたとしても、自分の読書傾向が高校時代からずっと据え置きになって、四年生まで上がってしまっている気がします。しかし大学時代という、本当に自由でいられる時間は人生においてそうあるものではありません。貴重な時間です。もっと読書の幅を広げつつ、できるだけたくさんの本を読んでみてください。きっとその後の人生の景色が変わるはずです。あとは映画もたくさん観てください。今はネットでも簡単に観ることができますよね。これはよく学生に伝えることですが、一日一本映画を見るだけでも年間にするとかなりの本数になります。それを四年間続けたら、膨大な数になるんですよ。本だって一週間に一冊読むだけでも四年間で相当な冊数になります。それは就活の時にも役立つはずです。たとえば「じつは私は映画を千二百本観ています」

と言えたら、それは、立派なアピールポイントではありませんか？そのことに気づかずに、せっかく日本文学科に入学したのに本をあまり読まなかったり、なんとなく高校までに吸収した本や映画の域を出ないまま上の学年に進んで、就活スキルが身についただけで社会人になってしまおうと、もったいないです。読書をはじめ、ぜひ映画を観たり、舞台や美術館に行ったりして、自分で主体的に色々なものを吸収していつてほしいです。

研究室探訪

井上高輔先生編



***まずは先生のご専攻を教えてください**

ださい。

日本語教育を担当しています。日本語教育は、日本語を母語としていない人のために日本語授業を行ったり、日本語学習の支援を行ったりするための学問です。実践が先立つ研究分野になります。基本的には日本語教育を行うことにあたって出てくる問題や疑問を解決していくことになります。

***その分野を専攻なさったきっかけや理由はなんですか？**

学生のときに専攻していたのが、「国語学」という日本語学にあたる分野で、元々の研究は日本語の文法を対象にしていました。大学院に進学してから、併せて日本語教育の課程も取っていました。きっかけとしては、そのように専門を進めていった形になります。あとは、大学院以降は、周りに留学生が多いという環境もあって、日本語教育という問題がずっと自分の中にできていたというのがあります。

***そこから研究職に進まれたのはどうしてだったのですか？**

高校生くらいのときから研究職自体になんとなく憧れていました。学部は塾の先生に勧めていただいて文学部を選びました。文学部に入

ると、いろいろな専攻があり、その中でまずは国語学という方向に進んでいきます。そのきっかけは、授業を受けてそれが一番しっくり来たからです。しっくりきたというのは、ちょうど現代語が扱われており、自分の母語なのですが、それを説明することが案外難しいということに気付きました。母語は身近なものなので、いくらでもふと考えられるんですよね。そうしてふと考ええていく流れで専門に入っていた感じですよ。大学院に進学してからは周りの半分以上が留学生でした。周りの留学生の方たちも、日本語教育に関する問題をよく考えていましたし、いろいろと日本語に関する質問を受けることも多く、留学生が書いた文章を見る機会もありました。また、大学院では隣接分野として日本語教育の授業を取っていたので、そういった環境に身を置いたことでだんだん日本語教育について考えるようになっていきました。最初は全然専門などは考えていなかったのですが、漠然と言葉に対する関心はありましたね。

***言語研究の魅力はなんですか？**

個人的には、まず、母語の研究の場合、使えるのに説明できない

くすぐったさがあると思います。あとは、言語の研究は、言語のことを言語で説明しようとしていることがほとんどという点がありますね。何かしら図式を持ってきてそれを使うことは非常に多いのですが、それだけではなく、やはり言葉がどうなっているかというのを、基本的には言葉で説明していこうとします。それはあまり他にはなさそうな不思議さというか、限界がそこにあるような気もしますが、魅力でもあります。不思議な点でもあり、欠点でもあるという感じがしますね。

***先生が思う日本語の魅力はなんですか？**

これも、魅力がなにかしらマイナスな面も持ち合わせているとは思いますが、漢字使用をしている言語であるというのは特徴的だと思います。かなと漢字と場合によつてはアルファベットも用いますね。漢字を使用しているというのは珍しい、というか、漢字の文化圏の言語というのはアジアで広いですが、漢字の文字そのものをまだ日常的に使い続けているのは中国語と日本語になりますね。あと、特徴的なのは敬語がありますね。これはよく指摘はされることだと思

いますが、敬語が言語の中で大きな体系を占めています。言葉なので文化的な側面というのは絶対に併せ持っていて、それは魅力になり得ると思います。どんな言語にもそれぞれの文化的なものは絶対あって、それが個別に魅力であるように、日本語でも文化と併せて一つの魅力を放っているのかもしれないですね。

***どのような研究活動をなさっているのですか？**

最近気になっているのは、「ヴォイス」というもので、言語学的な用語なのですが、受け身や使役、「やりもらい表現」や、自動詞他動詞が関わっていて、端的に言うところ、格助詞が述語の形によって入れ替わる現象を言います。それが気になるのはなぜかというと、ヴォイスが日本語教育の世界では難しいものとして有名だからです。上級と呼ばれるような学習者でもよく間違えるので、日本語教育の世界でよく話題になるものです。最近はその中でも特に自動詞と他動詞に興味を持って勉強しています。

***何か研究を通して得られた経験、研究ならではの経験はありますか？**

研究の世界は議論する世界です。

物事を批判的な姿勢で捉えつつ、批判を通して物事を評価したり素晴らしい点があるということを考えたります。研究の世界では、批判的な姿勢が一番スタンダードな姿勢だと思います。それはビジネスのような他の世界にはあまりない、特徴的な点ではないかと考えていて、そのような世界に身を置いているのは特殊な経験だと思いますね。

***授業や研究で大切にされていることはありますか？**

授業の方では、大切にしているのは、なぜそれを学ぶのかという意識を常に持つようにすることです。一斉授業という形態をいかに活かすかということに気にかけています。学習は個人的なもので、例えば親子であつたり友人であつたりと、とても小さい単位でも行うことができます。しかし、授業は人が大勢いる空間に自ら赴くというもので、せっかくなら人が集まっているという状態を活かさなければもったいないと考えます。研究の方では、当たり前ですが先行研究を丁寧に検討するというのを大切にしています。この工程を抜かして先に行くこともできませんから、戦うしかないと思います。

＊学びに関して学生にどのようなことを求めますか？

積極的に議論する姿勢です。授業の形式もいろいろあると思うのですが、大きく分けて講義系・演習系・実習系と分けられます。講義系においても積極的に思考することはできると思いますが、考えたことをクラスメイトにぶつけてみるというと思います。積極的に議論するという活動を通して、学んでいったり研究していったりする姿勢をぜひ持つてほしいですね。

＊授業に関してどのようなことにやりがいを感じますか？

学生さんが今考えている、と感じるときです。少なくとも、いい発言をしたときはしっかり考えたと分かりますし、考え込んでいる姿というのは目につくので、真剣に取り組んでいると感じます。

＊今年赴任なさって、青山学院に対する印象はいかがですか？

学生さんに関しては、非常に意欲的で真面目な方が多いと感じています。また、限られた知識の中で物事の要点をうまく掴む学生さんが多いとも思います。日文の先生方には、非常に温かく迎えていただき、非常に感謝しています。お

優しい方ばかりです。

＊先生の宝物はなんですか？

家族です。

＊学生にメッセージがあればお願いします。

第一に、タイミングがあれば気軽に話しましょう。また、日文の専攻の中でも、日本語教育は日本語学に隣接している分野でもありますが、文学というジャンルから離れていくものだと思います。ですから、日文に入ってきた学生さんの中には、縁遠く感じている方も多いと思うのですが、面白いこともあるのでぜひ知識に触れてみてください。

日本文学科同窓会から

日本文学科同窓会会長

松岡 嗣直

日本文学会会員の皆さま、お世話になっております。日本文学科同窓会会長の松岡嗣直です。

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。そして新入生の皆さん、ご入学おめでとうござい

ます。
日本文学科同窓会も2002年に創設されて早くも22年となりました。同窓会の目的は①会員相互

の親睦、②教養の向上、③大学・日本文学科の発展への寄与、が大きな柱です。

具体的には会報「ひいふうみい」の発行、著名講師や日本文学科教員による講演会の開催、9月の大学同窓祭での休憩茶屋「日文の部屋」の開設、春もしくは秋の文学散歩などを主な活動としています。講演会や文学散歩では日本文学科との連携や準会員である現役の日本文学科の学生・院生との繋がりがりも大切になっています。卒業生（1970年～2025年）から

在校生まで幅広い校友を対象に、持続可能な同窓会となれるよう皆さまの知恵と技術を戴ければ幸いです。

そのような中2024年度は、「ひいふうみい」第18号の発行から始まり、6月1日（土）には第10回日本文学科同窓会総会が開催されました。日本文学会総会でも行われているように「事業・活動報告」「決算報告」「事業・活動計画」「予算案」等の議案が承認されました。

その後9月16日（月・敬老の日）の大学同窓祭には上記の通り、「日文の部屋（17301教室）」、「公

開講座（17310教室）」（講演会）で参加し、どちらも盛況で、成功裡に終了しました。「日文の部屋」には「公開講座」（講演会）の講師である伊藤比呂美さん（1978年日本文学科卒・日本文学科同窓会会員）、日本文学科教授の小松靖彦先生（日本文学科同窓会顧問）、そして高橋克典同窓会実行委員長が来室され、日本文学科卒業生と歓談し、大いに盛り上がりました。

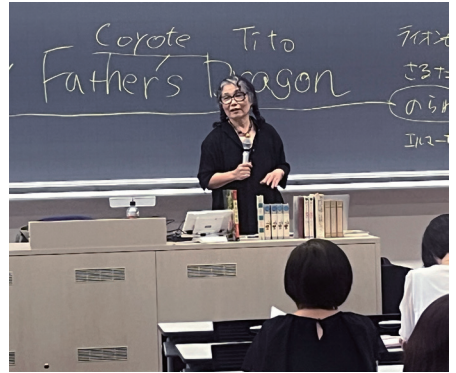
「公開講座」の演題は「昭和の頃、わたしの読んだ児童文学」で、伊藤さんがユーモアを交え、実際に児童文学書を手に取りながら、斬新かつ独自の解説・批評をして戴きました。

また、11月には「森村誠一展鑑賞会」も実施され、好評のうちに終了しました。

こういった活動を実行するためには、多くの人の知恵と汗が必要です。仕事や家事の負担にならない範囲で結構ですので、是非同窓会活動にご参加ください。

まずは日本文学科同窓会ウェブサイトをご覧ください。宜しくお願い申し上げます。





二〇二四年度講義題目

〈大学院〉

日本文学研究方法論

日本文学研究方法論

小松 靖彦

中古文学演習 (一)

『紫式部日記』精読

山口 一樹

中世文学演習 (一)

『保元物語』の読解と分析

滝澤 みか

中世文学研究 (二)

『続千載和歌集』研究

山本 啓介

近世文学演習 (二)

浄瑠璃『双生隅田川』精読

韓 京子

近世文学研究 (二)

「和莊兵衛もの」の黄表紙を読む

大屋多詠子

近代文学演習 (一)

研究テーマの展開を図る

武内 佳代

近代文学演習 (二)

近現代学会発表論文の完成

日置 俊次

近代文学演習 (三)

近現代文学思想の研究法を主とした研究成果の発表・討議

佐藤 泉

日本語学演習 (二)

コーパス、プログラミング、統計の基礎知識とスキルを学ぶ

大江 元貴

日本語学研究 (二)

古典語解釈文法研究

澤田 淳

日本語学演習 (三)

日本語の文法的主要概念を学ぶ

前田 直子

日本語教育学研究

日本語教育文法の研究手法を多角的に学ぶ

庵 功雄

中国古典学演習

『文選』精読

山崎 藍

日本文学研究 (一)

文学における植物の意味の解釈

WALLER, Loren David

日本文学研究 (二)

文学研究の理論と方法を学ぶ

石川 巧

〈学部〉

文学研究法

日本文学研究の基礎や方法を学ぶ

山口 一樹

佐藤 泉

滝澤 みか

山本 啓介

日本文学科研究入門

日本文学科の諸時代、諸分野への導入

全専任教員

日本文学史

上代・中古文学史

山口 一樹

中世文学史

滝澤 みか

近世文学史

韓 京子

近代文学史

日置 俊次

古典文学概論

江戸時代における古典注釈と受容

大屋多詠子

近代文学概論

近現代文学の基礎的知識や分析方法を実践的に学ぶ

武内 佳代

漢文学概論

中国文学が日本文学に与えた影響について

山崎 藍

日本語日本文学情報処理法

日本語日本文学におけるデータサイエンス

横山 詔一

日本語学概論

学術の見地から日本語を観察する

大江 元貴

日本語史

日本語の歴史について考察する

澤田 淳

表象文化研究概論

表象文化の解釈と分析

中澤 弥

日本学入門

普遍的な概念と地域的要素を考える

梅田 径

日本文明史 (英語講義)

文学交流入門

孫 世偉

文学交流入門

変容する文化／文学の様態

梅田 径

文学交流入門

変容する文化／文学の様態

梅田 径

戦時期の日本と中国の作家交流
(英語講義)

孫 世偉

日本文化文学入門

留学生のための日本文化文学入門

韓 京子

日本文学演習

詩を読む／ウクライナ・スロベニアとの〈文学交流〉

小松 靖彦

『日本書紀』の精読

天野 早紀

『後拾遺和歌集』の精読

吉田 幹生

『源氏物語』精読

山口 一樹

『蜻蛉日記』を読む

吉野 瑞恵

『新古今和歌集』の輪読

山本 啓介

『平家物語』の輪読

滝澤 みか

『絵本百物語』を読む

岡島 由佳

人形浄瑠璃『心中天の網島』精読

識

韓 京子

黄表紙『御存商売物』を読む

大屋多詠子

日本近代文学における「変身」

富永 真樹

日本近現代小説読解のための
研究方法を学ぶ

武内 佳代

現代短歌の研究と実作

日置 俊次

大正・昭和の文学論争から時代
と文学思想の関係を理解する

佐藤 泉

近代文学研究の基礎を学び論じ
る

吉野 泰平

村上春樹『若い読者のための短
編小説案内』輪読

山路 敦史

翻訳演習

翻訳論・日本文学・世界文学の
視点から文学を考える

WALLER, Loren David

中国古典文学演習

中国古典詩歌(楽府、六朝詩、
唐詩、宋詩、宋詞など)の精読

唐詩、宋詩、宋詞などの精読

中国文学・思想演習

中国の古典に関する基礎的な知
識の学習

中国の古典に関する基礎的な知
識の学習

中国の古典に関する基礎的な知
識の学習

中国の古典に関する基礎的な知
識の学習

中国の古典に関する基礎的な知
識の学習

中国の古典に関する基礎的な知
識の学習

中国の古典に関する基礎的な知
識の学習

中国の古典に関する基礎的な知
識の学習

中国の古典に関する基礎的な知
識の学習

中国の古典に関する基礎的な知
識の学習

中国の古典に関する基礎的な知
識の学習

文学交流演習

戦後から現在の日本のSFの歴
史と発展について学ぶ

LARSON Michael W

日本語学演習

社会言語学の観点から日本語と
社会の関係を考察する

澤田 淳

日本語教育における文法教育の
位置づけを理解する

庵 功雄

文法史、語彙史に関する代表的
な事項や研究方法について学ぶ

中川 祐治

日本語の「問い」を構築するス
キルを身につける

大江 元貴

日琉諸語をもとに言語学の基礎
と分析方法を学ぶ

加藤 幹治

日本文学講読

平安時代の私家集の特徴と魅力
を読み解く

諸井 彩子

説話文学を読み解く

渡辺麻里子

芥川賞から見る戦後日本文学史

帆苅 基生

上代文学の代表作品を原典で読む

孫 世偉

上代文学の代表作品を原典で読む

上代文学の代表作品を原典で読む

上代文学の代表作品を原典で読む

上代文学の代表作品を原典で読む

上代文学の代表作品を原典で読む

上代文学の代表作品を原典で読む

上代文学の代表作品を原典で読む

上田秋成『雨月物語』を読む

一戸 渉

中国古典文学講読

中国文学作品を分析し、中国文
学への理解を深める

山崎 藍

日本語学講読

日本語学の理念と研究手法を学
ぶ

庵 功雄

書道の歴史と実技

書の歴史をふまえた基本的事項
の理解と技法の習得

山下 由季

日本語教育概論

日本語の授業を行うために必要
な知識や技術について学ぶ

鈴木 秀明

日本語教授法

日本語非母国語話者に日本語を
教えるための必要な基本知識を
学ぶ

川端 芳子

特別演習

『萬葉集』・書物学・文学交流に
関する卒業論文作成指導

小松 靖彦

平安時代の文学作品を主たる対象とした卒業論文作成指導

山口 一樹

短詩形文学とそれに関連する作品を対象とした卒業論文作成指導

山本 啓介

主に中世文学を対象とした卒業論文作成指導

滝澤 みか

近世前期の文学を対象とした卒業論文作成指導

韓 京子

近世後期の文学を対象とした卒業論文作成指導

大屋多詠子

近現代文学を対象とした卒業論文作成指導

武内 佳代

近現代の文化、文学、思想に関する卒業論文作成指導

佐藤 泉

卒業論文作成指導

日置 俊次

主に中国文学を対象とした卒業論文作成指導

山崎 藍

日本語学を対象とした卒業論文作成指導

大江 元貴

日本語学関連をテーマとした卒業論文作成指導

澤田 淳

日本語教育演習A

日本語教育研究の中の日本語そのものに関する論文・概説書について批判的な姿勢で議論する

井上 高輔

日本語教育演習B

教科書分析や教室活動体験から日本語を教えることを考える

木田 真理

日本文学特講

五・七調（六・八調）詩歌論（近世・近代／平安・鎌倉）

小松 靖彦

平安時代の恋愛文学史

吉田 幹生

平安時代の物語史の読解

山口 一樹

『新古今和歌集』成立後の和歌史

山本 啓介

『平家物語』の親子たち／『太平記』の成立と展開

滝澤 みか

近松門左衛門の世話物の読解と浄瑠璃の考察

韓 京子

『南総里見八犬伝』解説

大屋多詠子

現代小説を通してクイア・フェミニズム批評・ジェンダー批評などの研究方法を学ぶ

武内 佳代

文学作品を通して近現代社会の規律・管理の在り方を考察する

佐藤 泉

横光利一研究―短編小説の世界―

日置 俊次

日本三大怪談『累（かさね）』の考察

岡島 由佳

文学交流特講

世界の中の日本演劇（能を中心）に／異性装という観念から

竹内 晶子

日本文学とアジア
中国文学と日本文学の相互影響

戸井 久

日本文学とアメリカ・ヨーロッパ戦後から現代の日本のSFの歴史と発展の考察

LARSON Michael W

表象文化論

能と狂言について多角的に考える

伊海 孝充

「表象文化論」の概要を把握する

大山 英樹

日本文学特講A

連句（俳諧と連歌）の鑑賞と実作

鈴木千恵子

中国文学・思想特講

中国文学や思想を身体と感覚に関する視点から読み解く
「漢字とは何か」について考える

松浦 智子

日本語学特講

現代日本語の言語事象を文法的に分析する

大江 元貴

日本語の特質を探る―ダイクシスからみる日本語―

澤田 淳

日本語の「授受表現」をめぐる日本語の文法を学ぶ

前田 直子

日本語教育特講

日本語教育の歴史を概観し、課題と展望について学ぶ

横山 詔一

日本語教育実習

日本語教育実習の実践的スキルを身につける

牛窪 隆太

日本文学研究のための英語

日本文学の研究に役立つ英語力を伸ばす

WALLER, Loren David

音声表現法

日本語学習者の発音から日本語の音声のしくみを学ぶ

木下 直子

文章表現法

学術的文章を書くためのルールと方法を身につける

八木下孝雄

【研究室だより】

*二〇二四年三月の卒業生は一一八名、四月入学生は一一二名でした。大学院前期課程の三月修了生は三名、四月入学生は七名でした。後期課程の修了生（論文博士）は三名、四月入学生は四名でした。

*二〇二四年度から新たに非常勤講師として、天野早紀、伊海孝充、一戸渉、小倉聖、加藤幹治、鈴木千恵子、鈴木秀明、前田直子、諸井彩子、八木下孝雄、吉田幹生、吉野泰平、渡辺麻里子、

LARSON, Michael W. 平間充子の諸先生方にご尽力いただいています。

*二〇二四年度は、山本啓介教授が学年主任を務められました。

*二〇二四年度は高田祐彦教授が特別研究（青山学院大学のため休講なさいました）。

*二〇二四年度日本文学会大会（春季）・講演会・総会が、六月二十二日に開催されました。講演会については本会報五頁をご覧ください。

*副手の渡辺眸さん、成田由紀さんが退任され、石原直美さん、村岡しのぶさんが着任されました。

*二〇二四年四月より、近現代文学がご専門の武内佳代教授と、日本語教育学がご専門の井上高輔助教が着任されました。

編集後記

はじめに、今回「会報」の作成にご協力いただいたすべての方々に感謝を申し上げます。

新型コロナウイルスの最初のパンデミックから早くも四年が経ち、それぞれが新たな基準を掲げて再生し始めています。青山学院大学では、対面形式とオンライン形式、それぞれの特徴を活かしな

がら授業が進められており、学生にはそれを上手く利用しながら履修を組む技術が新たに求められるようになっていきます。いま改めてコロナ禍で私たちが失ったものを考えてみると、それは将来への期待や希望と、漠然とした信頼感だったのではないかと思います。そして日常の脆弱さを突きつけられた私たちは以前より「いま」を大事にするようになったように感じます。これは一見明るいメッセージのように見えて、実際には即物的で利己的なメッセージでもあります。

復興が喫緊の目標に置かれる中で、文学は最も軽んじられた学問のうちの一つでしょう。医療費や兵器の研究開発費が増え、文学部廃止論争が再熟するのも予想に容易いことでした。AI兵器と同じように、言葉も兵器になり得ます。一方で言葉それ自体が業にもなり、人の命を救う力を持つことを実感してきた人も多いのではないのでしょうか。しばらく文学に対する風当たりは強いかもしれませんが、自分の目標を見失わないように、これからも学問に真摯に向き合っていきたいと思っています。

今年度日文委員会は青山祭での出展を見送り、来年度の青山祭での出展を目標にした古本市の準備と日文新聞の製作に取り組んでいます。未だ手探りでありますが、先輩方が受け継いできた一つの伝統をこれからも繋いでいけるよう励んでいきます。

（米山すみれ）

編集委員

教員

佐藤 泉 山崎 藍

学部三年生

米山 すみれ

学部二年生

熊井 花音 小林 愛佳

嶋崎 花音 廣井 麻央

学部一年生

安部 晴香 前田 龍甫

会 報 第五十九号

二〇二五年三月一五日 発行

渋谷区渋谷四一四一二五

青山学院大学総研ビル10F

日本文学科研究室内

編集 青山学院大学日本文学会

電話 (〇三)三四〇九一七九一七

FAX (〇三)三四〇九一八〇〇五